

Learned Helplessness の形成過程における Type A 行動パターン、Self-Efficacy および原因帰属の役割

The role of Type A behavior pattern, self-efficacy and attribution in the process of learned helplessness

前田 基成

Motonari Maeda

問題

狭心症や心筋梗塞などの冠動脈性心疾患 (coronary heart disease) の発症に関しては、加齢、動脈硬化、高血圧症、高脂血症、糖尿病、喫煙、肥満などが身体的・生理的危険因子として認められてきた。その後、これらに加えて、心理的・社会的因子について研究されるようになり、当初は、社会的移動や地位の変動と発症との関係、不安や神経症傾向との関係など、数多くの知見が報告されたが、必ずしも一致した見解は得られなかった。そのような中で、Friedman & Rosenman (1959) は、冠動脈性心疾患の患者には共通して認められる行動特徴があることに注目し、疫学および臨床医学的に検討し、coronary-prone 行動パターンもしくは Type A 行動パターンの概念を提唱した。

Type A 行動パターンとは次のような行動特徴として定義される。①目標に向かって懸命に邁進する。②競争心が強い。③野心的である。④いつも時間に追い立てられている。⑤加速度的な思考と行動をもつ。⑥心身ともに過敏である。⑦攻撃的で敵愾心をもつ。すなわち、達成努力としての精神的な活動性、時間的切迫感、競争心・攻撃性などの行動特徴を示す。なお、これと反対の特徴を有する行動傾向を Type B 行動パターンという。Type A 行動パターンと冠動脈性心疾患発症との関連性については、各国で疫学的追試が数多くなされ、Type A 行動パターンが冠動脈性心疾患および動脈硬化症の危険因子であることが実証されている (例えば、Jenkins, 1976; 五島, 1982; 田川ほか, 1984)。

このような行動特徴としての Type A 行動パタ

ーンを有する人 (以下 Type A 者と記す) が、自分の努力が結果を何らコントロールできない場合、つまり、いくら努力しても成功経験など、それに随伴した結果が与えられない状態 (連続的失敗経験) に直面したときの反応はいかなるものであろうか。普通の人がこのような状態におかれると、統制不能性 (uncontrollability) を抱き、無力感に陥ってしまう (学習性無力感 learned helplessness; 以下 LH と記す)。すなわち、「いくら努力したところで、自分のおかれている状態になんら良い方向への変化が生じそうにないと信じ、すっかり意欲を失ってしまう」(波多野・稲垣, 1981) のである。Type A 者については、Glass (1977) によって次のような指摘がなされている。統制不可能事態 (連続的失敗経験) が短ければ、それに続く統制可能事態において、Type A 者は統制確保のために精力的な努力をする。しかし、その反対に、統制不可能の経験が十分に長いときには、それに続く統制可能事態においても、Type A 者はもはや行動遂行のための何の努力もせず、無気力状態を示すというものである。言い換えれば、Type A 者は Type B 者に比べて LH の状態に陥りやすいといえる。

ところで、LH に関する変数として、原因帰属と self-efficacy があげられる。

原因帰属と LH との関連性としては、抑うつ傾向の帰属スタイル (depressive attributional style) とよばれる特定の原因帰属様式を示す人は LH に陥りやすいとされる (Seligman et al., 1979; Seligman et al., 1984)。このことは、統制不可能事態における Type A 者と Type B 者との間に

は、何らかの原因帰属の仕方の違いがあることを推測させる。

また、Bandura(1977)によれば、行動が効果的に遂行されるためには、当該の行動を自分ほどの程度確実に行うことができるかという予期である self-efficacy を高く認知することが、行動遂行の先行要因として重要であるとされ、これまでに臨床場面において、self-efficacy 認知と行動遂行ないしは症状改善との間に密接な関係があることが報告されている(例えば、前田, 1991; 前田ほか, 1987)。この self-efficacy と LH の関連性については、従来、self-efficacy が低く認知されているときは、人は無気力、無感動、自己卑下、抑うつなど、LH と類似した行動特徴を示すこと(Bandura, 1985)、また、人は抑うつ状態にあるときには self-efficacy を低く認知すること(Kanfer & Zeiss, 1983)、さらには、LH の状態が形成されると self-efficacy を低く認知すること(坂野ほか, 1988)などの報告がなされている。

これらのことは、統制不可能事態におかれたときに、Type A 者と Type B 者との間には self-efficacy 認知の違いがあることを推測させる。

以上のことから前田(1992)は、統制不可能事態およびその後続く統制可能事態における Type A 者と Type B 者の self-efficacy 認知および原因帰属について検討し、次のような結果が得られた。すなわち、統制不可能事態では、Type A 者は Type B 者に比較するとより急速に課題遂行に対する self-efficacy が低下する。また、それに続く統制可能事態では、Type A 者は統制不可能事態で低下した self-efficacy が Type B 者に比較すると急激に上昇する。さらに統制不可能事態における連続的失敗経験の原因について、Type A 者は Type B 者に比べ、「調子の悪さ」、「運の悪さ」といった外的要因により強く帰属する。

しかしながら、前田(1992)の実験では、連続的失敗経験が10試行と短いことから、統制不可能事態における self-efficacy の低下は一時的なもので、LH の状態に陥ったためのものであるかどうかは疑問である。LH の状態でないことは、抑うつ帰属スタイルとは異なった、外的な原因帰属をしていることからもうかがわれる。

そこで本研究では、前田(1992)の実験の統制

不可能事態を長くし、統制不可能事態およびその後続く統制可能事態における。Type A 者と Type B 者の self-efficacy 認知および原因帰属について検討を加えることを目的とする。

方法

1. 被験者

首都圏の大学生405名に対し、Jenkins Activity Survey 学生用(Krantz et al., 1974)を実施し、その結果より得点順に上位から10名、下位から10名を選んで、それぞれ Type A 群(男子5名、女子5名)、Type B 群(男子5名、女子5名)とした。各々の群の Jenkins Activity Survey の平均得点は、Type A 群11.68 (SD=1.30)、Type B 群1.38 (SD=1.27)であった。

2. 課題

Fig.1 に示すような数列の穴埋め課題50題が用意された。課題は解決可能課題と解決不可能課題から構成され、全50題のうち、26題が解決可能課題、24題が解決不可能課題であった。解決不可能課題とは、みかけは数列の穴埋め課題になってはいるが、実際はいかなる数列にもなっていない、すなわち絶対に解けるはずのない課題である。

課題は1頁に1題印刷された冊子を用いて提示され、1試行につき1題提示した。また、各課題には星印(★)が1~3個(★~★★★)表示されており、これは各課題の難易度を表すもので、星印の数が多くなるほど難易度が高くなることを示していると被験者は説明を受けたが、実際は、

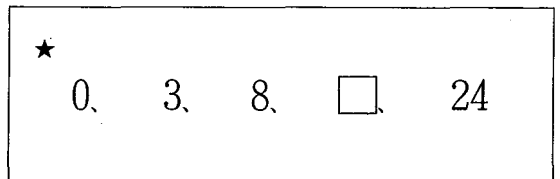


Fig.1-(1) 数列の穴埋め課題(解決可能課題)の例

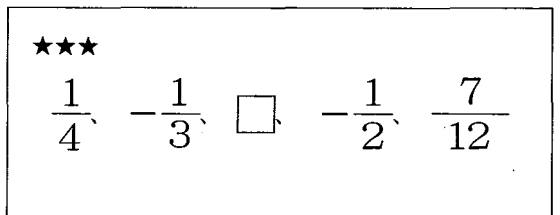


Fig.1-(2) 数列の穴埋め課題(解決不可能課題)の例

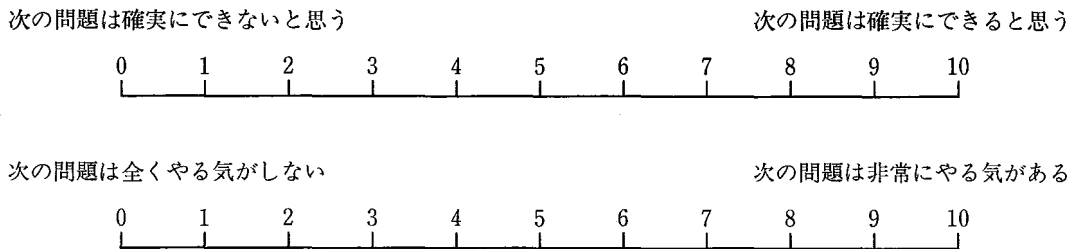


Fig.2 self-efficacy, motivation の測定用紙

解決可能課題については星印の数に関係なく、課題の難易度は一定に統一されていた。

3. self-efficacy および motivation の測定
self-efficacy および motivation の測定には、Fig.2 に示すような内省報告用紙が使用された。

self-efficacy は「次の問題は確実にできないと思う」(0点) から「次の問題は確実にできると思う」(10点) まで、11段階で評定を求めた。また、motivation も同様に、「次の問題は全くやる気がしない」(0点) から「次の問題は非常にやる気がある」(10点) までの11段階で評定を求めた。

self-efficacy および motivation の測定は、数列

課題の練習試行の後、本試行の数列課題第1題の解答前に第1回目の評定を行い、以下同様に、本試行50試行の各課題の解答前にそのつど評定し、全部で50回の評定を行うこととした。

4. 原因帰属の測定

本試行50試行の5試行ごとに(数列課題を5題解くごとに)、その5試行の結果について原因を推測するように求めた。原因帰属要因としてとりあげたのは、「努力」、「能力」、「調子」、「課題の難しさ」、「運」の5つである。これらの要因と数列課題5試行の間に認知された関連の度合いを、Fig.3 に示すような内省報告用紙を用いて11段階(0～

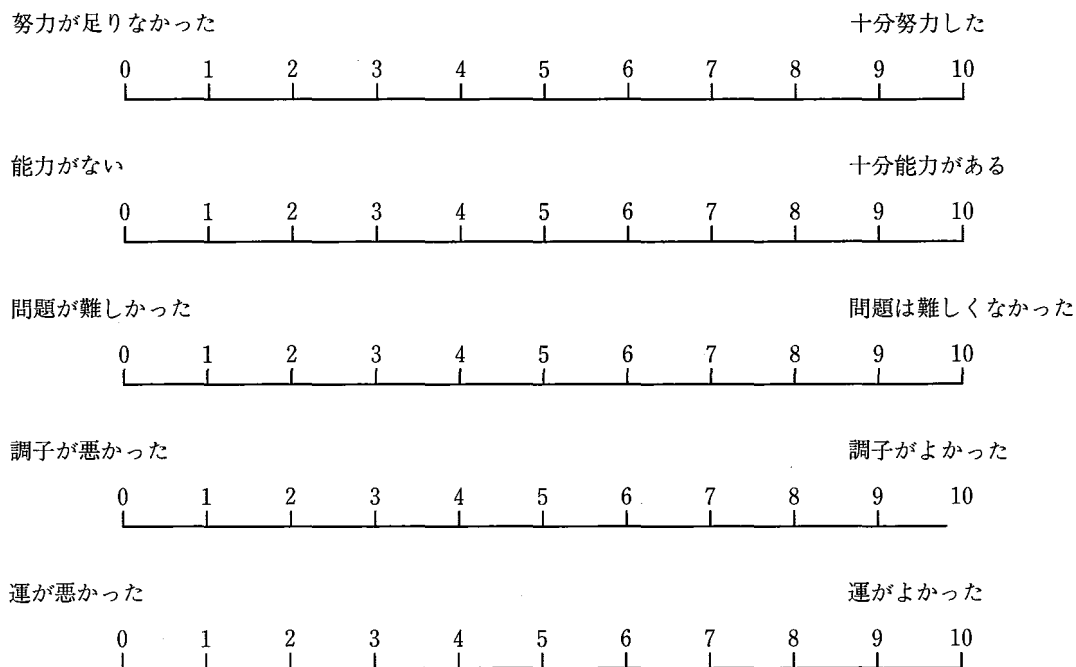


Fig.3 原因帰属の測定用紙

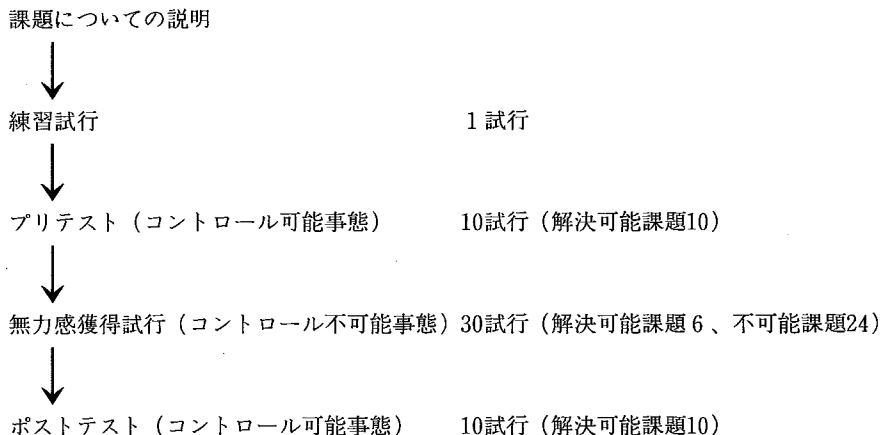


Fig.4 実験の主な手順

10点) で評定するよう求めた。

5. 手続き

実験はすべて個別に行われた。実験の主な手順は Fig.4 に示す通りである。実験は、課題・手順についての説明、練習試行1 試行、本試行50試行の順に実施された。本試行は、self-efficacy および motivation の評定をすることと数列課題を1 題解くことをあわせて1 試行とし、まず統制可能事態であるプリテスト10試行、次に統制不可能事態である無力感獲得試行30試行、最後に再び統制可能事態であるポストテスト10試行が、休憩をはさむことなく連続して行われた。

プリテスト10試行はすべて解決可能課題で、各課題の難易度表示はすべて★であった。無力感獲得試行30試行は、最初の6 試行が解決可能課題、それに続く24試行が解決不可能課題で、難易度表示は★★が12試行、★★★が18試行であった。ポストテスト10試行はすべて解決可能課題であり、難易度表示は★★が4 試行、★★★が6 試行であった。無力感獲得試行およびポストテストでは、★★の課題または★★★の課題がランダムに配列された。

各試行で、数列課題を解く制限時間は1 分間とした。回答がなされた場合には「正解です」もしくは「間違っています」という正誤のフィードバックが、回答がなされないまま制限時間が終了した場合には「できませんでしたね」あるいは「残念でした」などの言語的教示が与えられた。また、

難しく解けないと思った場合には、制限時間が来る前に「できません」と解答放棄を申し出てもよいことが、被験者にあらかじめ説明された。

結果

1. 数列課題の成績

プリテストにおける平均正答率は Type A 群が 5.90 (SD=1.30)、Type B 群が 5.96 (SD=1.64) で、両群の間に有意な差は認められなかった。したがって、2つの群は用いられた数列課題の解決に必要な数学的能力において差はなく、等質であるとみなすことができる。ポストテストでの平均正答数は Type A 群が 5.28 (SD=1.64)、Type B 群が 5.0 (SD=1.76) であった。プリテスト、ポストテストの結果について、群とテストを要因とする 2×2 の分散分析を行った結果、群、テストの主効果および交互作用のいずれも有意ではなかった。無力感獲得試行およびポストテストの20試行において、1 分間の制限時間が来る前に解答の放棄を申し出た放棄回数の平均は、Type A 群が 0.86 (SD=1.43)、Type B 群が 1.07 (SD=2.18) であり、これも両群の間に有意な差はみられなかった。

2. self-efficacy

全50試行を、5 試行を1 ブロックとする10ブロックに分け、各ブロックごとの Type A 群および Type B 群の self-efficacy の平均評定値の推移を示したものが Fig.5 である。各群のプリテスト(第

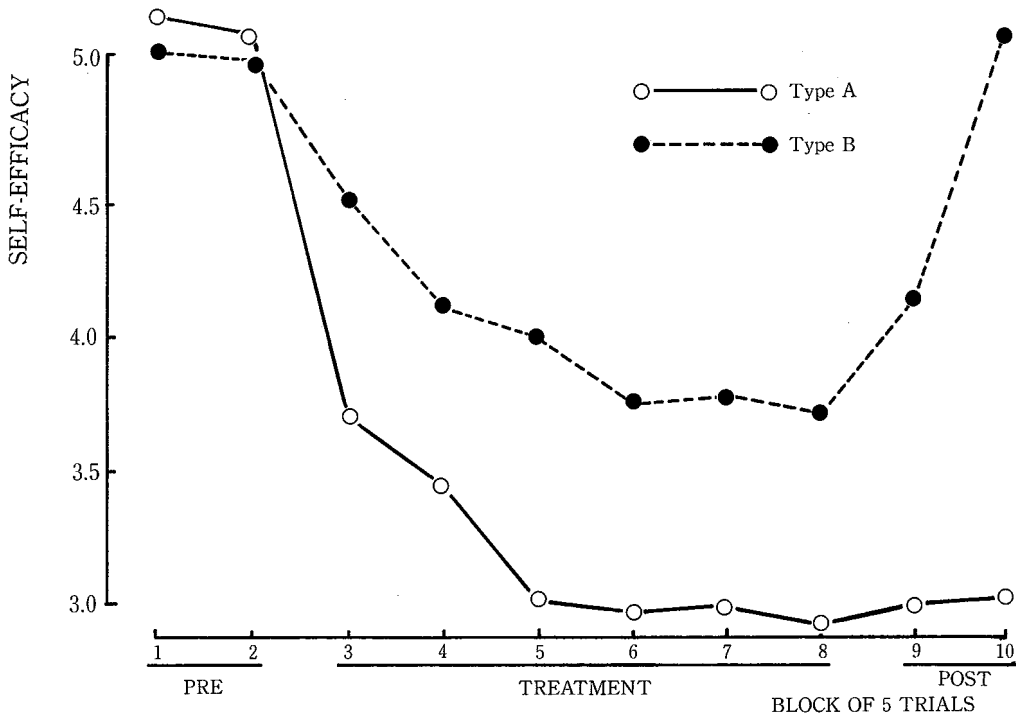


Fig.5 SELF-EFFICACY の推移

1、第2ブロック)の平均評定値について、群とブロックを要因とする 2×2 の分散分析を行ったところ、群およびブロックの主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。したがって、用いられた数列課題に対する self-efficacy に関して、2つの群は等質であるといえる。

次に、全ブロックの平均評定値について、群とブロックを要因とする 2×10 の分散分析を行った。その結果、群の主効果 ($F=13.64$, $df=1/80$, $p < .01$) およびブロックの主効果 ($F=9.76$, $df=9/80$, $p < .01$) が有意であり、交互作用は有意ではなかった。下位検定の結果、Type A 群では、第2ブロックと第3～第10の各ブロックとの間(第2ブロック—第3ブロック間で $t=7.74$, $df=8$, $p < .01$)、第3ブロックと第5～第10ブロック間(第3ブロック—第5ブロック間で $t=3.40$, $df=9$, $p < 0.5$)において、Type B 群では、第2ブロックと第3～第8の各ブロックとの間(第2ブロック—第3ブロック間で $t=3.48$, $df=9$, $p < .05$)において、有意に self-efficacy 評定値が低下していた。さらに Type B 群では、第8ブロック—第10ブロック間 ($t=7.14$, $df=9$, $p < .01$)

第9ブロック—第10ブロック間 ($t=5.10$, $df=9$, $p < .01$) で評定値が有意に上昇していた。また、各ブロックにおける Type A 群と Type B 群の平均評定値の差を検討したところ、第3～第10ブロックの各ブロックにおいて、Type A 群と Type B 群との間に有意差がみられた(第3ブロックで $t=3.54$, $df=9$, $p < .05$)。これらの結果は、無力感獲得試行において、Type A 群は Type B 群に比べて速やかに、大きく self-efficacy が低下し、ポストテストでは、Type B 群は低下した self-efficacy が上昇するのにに対し Type A 群は低下したまま上昇しないことを示している。

3. motivation

self-efficacy と同じように、全50試行を、5試行を1ブロックとする10ブロックに分け、各ブロックごとの Type A 群および Type B 群の motivation の平均評定値の推移を示したものが Fig.6 である。各群のプリテスト(第1、第2ブロック)の平均評定値について群のブロックを要因とする 2×2 の分散分析を行った結果、群およびブロックの主効果、交互作用のいずれも有意ではなく、用いられた数列課題に対する motivation に関し

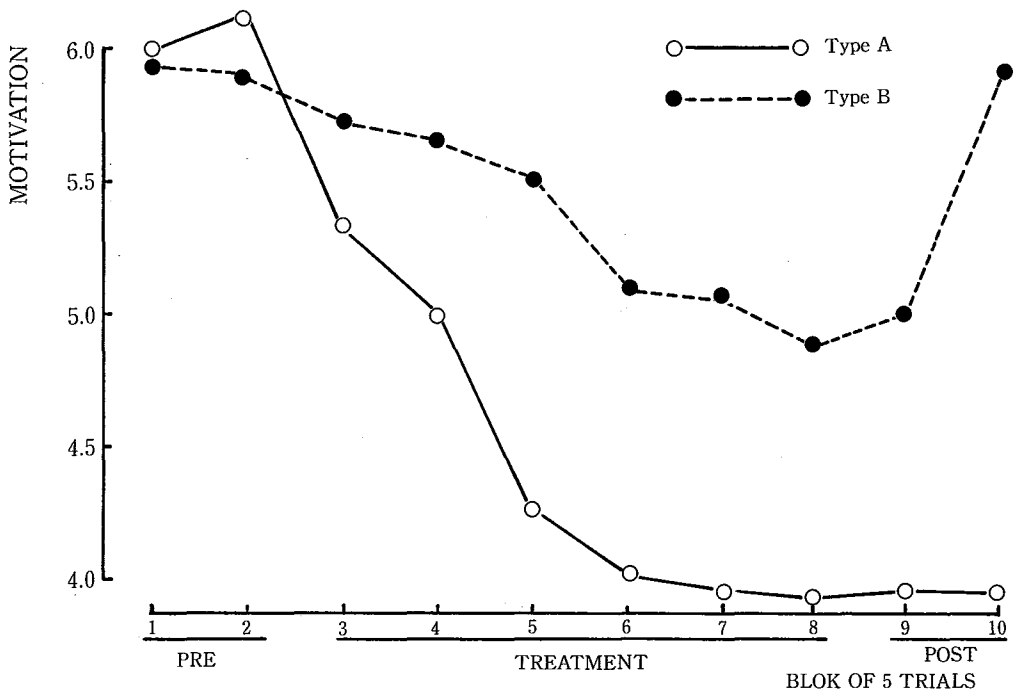


Fig.6 Motivation の推移

て、2つの群は等質であるといえる。

次に、全ブロックの平均評定値について、群とブロックを要因とする 2×10 の分散分析を行ったところ、群の主効果($F=16.78$, $df=1/80$, $p<.01$)およびブロックの主効果($F=11.76$, $df=9/80$, $p<.01$)が有意であり、交互作用は有意ではなかった。下位検定の結果、Type A群では、第2ブロックと第4～第10の各ブロックとの間(第2ブロック—第4ブロック間で $t=3.10$, $df=9$, $p<.05$)、Type B群では第2ブロック—第8ブロック間($t=3.16$, $df=9$, $p<.05$)で、有意にself-efficacy評定値が低下し、さらにType B群では、第8ブロック—第10ブロック間($t=3.87$, $df=9$, $p<.05$)、および第9ブロック—第10ブロック間($t=3.64$, $df=9$, $p<.05$)で評定値が有意に上昇していた。また、各ブロックにおけるType A群とType B群の平均評定値の差を検討したところ、第5～第10ブロックの各ブロックにおいて、Type A群とType B群との間に有意差がみられた(第5ブロックで $t=3.41$, $df=9$, $p<.05$)。これらの結果は、Type A群は無力感獲得試行に入ると、課題解決に対する意欲が速やかに、

大きく低下し、ポストテストになっても低下したままであるのに対し、Type B群は無力感獲得試行でも、Type A群ほど速やかに低下せず、ポストテストに入ると低下していた課題解決に対する意欲が上昇することを示している。

4. 原因帰属

原因帰属の測定は、全50試行を、5試行を1ブロックとする10ブロックに分け、各ブロック5試行の数列課題の結果についての原因を推測するという手続きで実施された。測定された5つの原因帰属要因のプリテスト(第1、第2ブロック)の平均評定値について、群とブロックを要因とする 2×2 の分散分析を行ったところ、いずれの要因についても、群、ブロックの主効果および交互作用のいずれも有意ではなかった。したがって、2つの群はプリテスト10試行の結果について同じような原因帰属をしており、等質であるといえる。

次に、それぞれの原因帰属要因の全ブロックの平均評定値について、群とブロックを要因とする 2×10 の分散分析を行ったところ、次のような結果が得られた。すなわち、「能力」および「調子」の要因に関しては、群、ブロックの主効果、交互

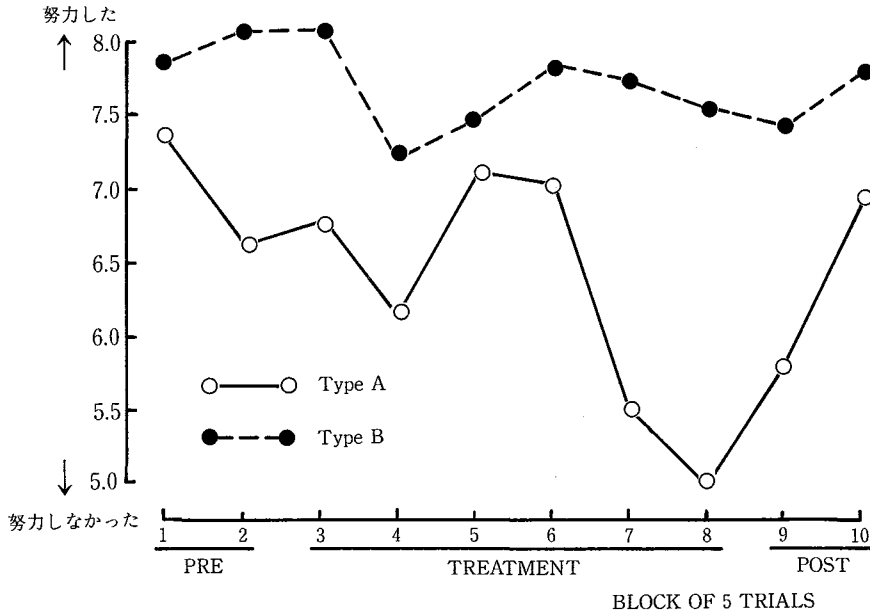


Fig.7 「努力」への原因帰属の推移

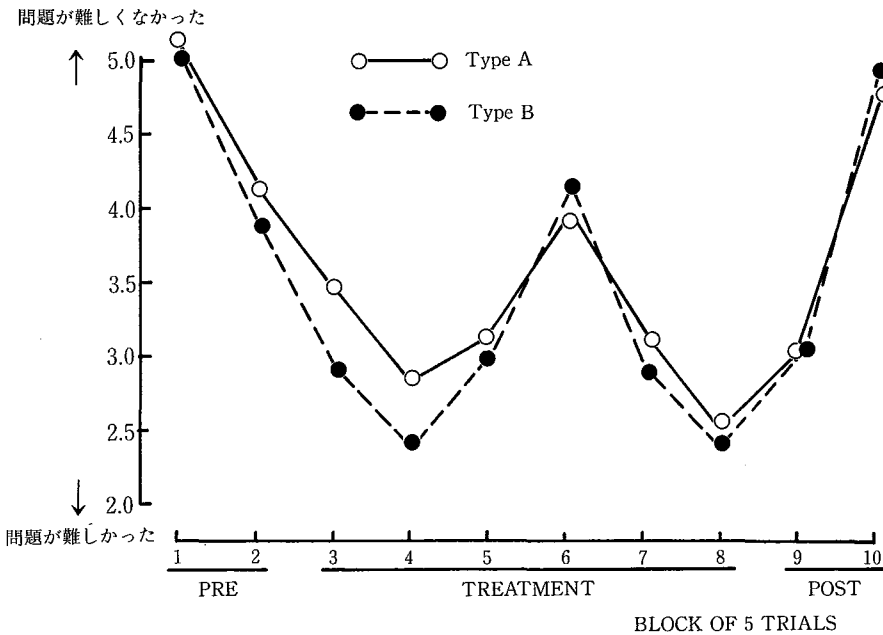


Fig.8 「課題の難しさ」への原因帰属の推移

作用のいずれも有意ではなかった。「努力」の要因に関しては群の主効果 ($F=12.48, df=1/180, p<.01$) が、「課題の難しさ」の要因に関してはブロックの主効果 ($F=4.75, df=9/180, P<.01$) が、「運」の要因に関しては群の主効果 ($F=$

$8.17, df=1/180, P<.01$)が、それぞれ有意であった。そこで、「努力」、「課題の難しさ」、「運」のそれぞれの要因について、引き続いて以下のような下位検定を行った。

「努力」の要因に関して、各ブロックにおける

Type A 群と Type B 群の平均評定値の差を検討したところ、第7ブロック ($t=3.34$, $df=9$, $p<.05$) および第8ブロック ($t=3.08$, $df=9$, $p<.05$) において、Type A 群の方が Type B 群よりも有意に評定値が低かった (Fig.7)。これは、無力感獲得試行における連続的失敗の原因について、Type A 群は Type B 群に比べて、努力が足りなかったと認知しているといえる。

「課題の難しさ」の要因に関しては、Type A 群では、第1ブロック—第4ブロック間 ($t=3.81$, $df=9$, $p<.05$) および第8ブロック—第10ブロック間 ($t=3.00$, $df=9$, $p<.05$) において、Type B 群では、第1ブロック—第4ブロック間 ($t=3.46$, $df=9$, $p<.05$) において、有意な差がみられた。また、Type B 群の第8ブロック—第10ブロック間 ($t=2.67$, $df=9$, $p<.05$) で評定値が上昇する傾向がみられた (Fig.8)。このことは、両群とも同じように、無力感獲得試行での失敗経験およびポストテストでの成功経験の原因を、課題の難しさのためと考えていることを示している。

「運」の要因に関して、各ブロックにおける両群の平均評定値の差を検討したところ、第6ブロック ($t=2.65$, $df=9$, $P<.1$)、第9ブロック ($t=2.66$, $df=9$, $p<.1$) において、Type B 群の方が Type A 群よりも評定値が低い傾向がみられた。

考 察

Glass (1977)は、統制不可能事態の後に引き続いて統制可能事態が生起するとき、統制不可能事態が短ければ、それに続く統制可能事態において、Type A 群は精力的な努力をし、行動遂行は上昇するが、統制不可能の経験が長いときには、統制可能事態においても、Type A 群は行動遂行の努力をせず、LF 状態に陥るという結果を得ている。前田 (1992) はこのことを、短い統制不可能事態を用いた実験事態において、self-efficacy および原因帰属の面から検討した。その結果、Type A 群は統制不可能事態で、Type B 群に比べるとより急速に self-efficacy が低下したものの、統制可能事態に移行すると、低下した self-efficacy が急激に上昇した。さらに Type A 群は、統制不可能事態における連続的失敗経験の原因を、外的要因に帰属していた。

これに対し、今回、統制不可能事態を10試行から30試行へと長くした以外は、前田 (1992) の実験と全く同じ手続きで検討したところ、次のような結果が得られた。すなわち、Type A 群は、統制不可能事態である無力感獲得試行では、Type B 群よりも self-efficacy 認知および動機づけのレベルが急速に、大きく低下した。これは短い統制不可能事態を用いたときと同じである。しかしながら、統制可能事態であるポストテストに移行すると、両群ともほぼ同じような数列課題の正答率であるにもかかわらず、Type B 群は低下していた self-efficacy の認知および動機づけのレベルが上昇していくのに対し、Type A 群は低下したままであった。また、統制不可能事態における原因帰属で、Type A 群と Type B 群との間ではっきりとした差がみられたのは、「努力」への帰属であった。統制不可能事態での失敗の原因について Type A 群は、「努力が足りなかったから」という内的帰属をする傾向が Type B 群に比べて強かった。これは、LH が獲得された状態では動機づけのレベルが低下するばかりではなく、self-efficacy のレベルも低い状態にある (坂野ほか、1988)、および、統制不可能な結果に対して、その原因を内的・安定的・全体的な要因に帰属すると (本研究では安定的、全体的な原因帰属次元は測定していない) LH の状態に陥りやすい (Abramson et al., 1978) という従来知見と考え合せると、30試行の統制不可能事態での連続的失敗経験により、Type A 群は LH もしくはそれに近い状態に陥ったと考えられる。

以上、今回の結果と前田 (1992) の結果から、次のようなことがいえる。まず、自分の努力が結果を何らコントロールできない統制不可能事態におかれると、Type A 者は Type B 者に比べて、課題遂行に対する self-efficacy が急速に大きく低下する。統制不可能事態が短いときには、Type A 者は統制不可能事態での失敗の原因を外的要因に帰属する。そして、統制不可能事態に引き続いて統制可能事態に移行し、成功経験をもつことによって、低下していた self-efficacy が Type B 者に比較すると、より急速に上昇し、同じように低下していた動機づけのレベルも急速に上昇する。しかしながら、統制不可能事態が長いときには、

Type A 者は内的な原因帰属を行い、統制可能事態に移行して成功経験をもっても、低下していた self-efficacy と動機づけのレベルは上昇することはない。これに対して、Type B 者は統制不可能事態が短くても、長くても、統制可能事態で成功経験をもつことで、同じように self-efficacy と動機づけのレベルは上昇する。

これらのことは、パフォーマンスでは差がみられなかったものの、Glass(1977) の Type A 者の方が Type B 者よりも LH に陥りやすいという知見を支持しているように思われる。そして、その背後には、自己の行動遂行に対する Type A 者と Type B 者との self-efficacy 認知の違い、および原因帰属の仕方の違いが介在していると考えられる。橋本(1980)は、統制不可能事態で Type A 者は驚異やフラストレーションを経験するので、続く統制可能事態では、コントロールを確保しようとしてより精力的、奮闘的な努力を行うとしている。これは、前田(1992)の統制不可能事態が短い場合において、self-efficacy は一度は低下するものの、統制可能事態では再び急激に上昇するという結果に対応する。すなわち、統制不可能事態が短くても、長くても、連続的な失敗経験によって、Type A 者の self-efficacy は一旦大きく低下する。それが統制可能事態に移行して成功経験をもつと、統制不可能事態が短い場合は、それによって self-efficacy は Type B 者に比べて大きく上昇する。また、統制可能事態が短いときには、連続的失敗経験の原因を Type B 者に比べて、より外的な要因に帰属をする。これがコントロール確保のためより精力的な努力となって現れると考えられる。しかし統制不可能事態が長い場合には、統制可能事態における自己の行動遂行に対する self-efficacy の認知の仕方が Type B 者のそれとは全く異なってしまう、連続的失敗経験の原因帰属も、Type B 者に比べると、より内的な要因に帰属するようになる。この self-efficacy 認知および原因帰属の違いが LH に陥りやすさとなっているものと推測できる。

(まえだ もとなり 非常勤講師)
(1992. 6. 30受理)

引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P. & Teasdale, D. 1978 Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Bandura, A. 重久剛(訳) 1985 自己効力(セルフ・エフィカシー)の探求 祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊(編) 社会的学習理論の新展開 103-139, 金子書房.
- Friedman, M. & Rosenman, R. 1959 Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings. *Journal of the American Medical Association*, **169**, 1286-1296.
- Glass, D.C. 1977 Behavior patterns and coronary disease. New Jersey: Erlbaum.
- 五島雄一郎 1982 虚血性心疾患と行動パターン 心身医学, **22**, 373-379.
- 橋本 幸 1980 Type A 行動をめぐる最近の諸問題—ストレス・不安との関連— 心理学評論, **23**, 322-332.
- 波多野諄余夫・稲垣佳世子 1981 無気力の心理学 中央公論社.
- Jenkins, C.D. 1976 Recent evidence supporting psychological and social risk factors for coronary disease. *New England Journal of Medicine*, **294**, 987-994; 1033-1038.
- Kanfar, R. & Zeiss, A.M. 1983 Depression, interpersonal standard setting, and judgements of self-efficacy. *Journal of Abnormal Psychology*, **92**, 319-329.
- Krantz, D.S., Glass, D.C. & Snyder, M.L. 1974 Helplessness, stress level, and the coronary-prone behavior pattern. *Journal of experimental social psychology*, **10**, 284-300.
- 前田基成 1991 児童の恐怖症の心理治療におけるセルフ・エフィカシーと行動変容に関する検討 教育相談研究, **29**, 31-35.
- 前田基成・坂野雄二・東條光彦 1987 系統的脱感作法による視線恐怖反応の消去に及ぼす Self-Efficacy の役割 行動療法研究, **12**, 45-58.

- 前田基成 1992 ストレス事態における self-efficacy 認知、原因帰属と coronary-prone 行動パターン 上田女子短期大学紀要, **15**, 95-106.
- 坂野雄二・前田基成・東條光彦 1988 獲得された無力感の解消に及ぼす Self-Efficacy の効果 行動療法研究, **13**, 45-53.
- Seligman, M.E.P., Abramson, L.Y., Semmel, A. & von Baeyer 1979 Deoressive attributional style. *Journal of abnormal psychology*, **88**, 242-247.
- Seligman, M.E.P., Peterson, C., Kaslow, N., Tanenbaum, R.L., Alloy, L.B. & Abramson, L.Y. 1984 Attributional style and depressive symptoms among children. *Journal of abonormal psychology*, **93**, 235-238.
- 田川隆介・保坂 隆・大須賀 等・大枝泰彰・杉田 稔・日野原茂雄・五島雄一郎 1984 A型行動パターンと虚血性心疾患 ——冠動脈所見における検討 心身医学, **24**, 203-208.